

支援者としてのあり方の実践



Ⅱ. 支援の理論的基盤

知的障害のある
犯罪行為者への支援を学ぶ研修会
〈基礎研修会 中級編〉

2021年10月

水藤 昌彦
山口県立大学／国立のぞみの園
m.mizuto@yamaguchi-pu.ac.jp

講義の項目

Ⅰ. アセスメントの意義と要点

Ⅱ. 支援の理論的基盤★

Ⅲ. 専門職倫理と支援者自身のケア

Ⅱ. 支援の理論的基盤



ソーシャルワーク・福祉の視点からの捉え方
= 多様で複雑化した生活上のニーズをもつ人への支援

- 状況への対処を困難にする「個人」や「周囲」の事情
- 自分なりの対処 → 刑事司法機関との接触を誘発
- 犯罪をした者としてのラベリング
- 強固な「犯罪者イメージ」による排除 = 社会的孤立



生活モデル：個人と環境の相互作用への着目
ソーシャルサポートの視点による支援

生活モデルによる理解

- 生活モデルの視点 (水藤 2021)
 - ✓ 支援にあたって、生活の質 (QOL) の増進を意図
 - ✓ 「本人」と「本人を取り巻く環境」に関連するさまざまな要因が相互に影響し合っているという見方
- 基本となる考え方 (猪飼 2016)
 - ✓ 人の生活は複雑であることが前提
 - ✓ 「生活の質 (QOL) 」を知ることはできないが、探し続けること = 「生きること」
 - ✓ 伴走 / 寄り添い型の支援
 - ✓ 効率や効果を指向していない

生活モデルの中核的要素

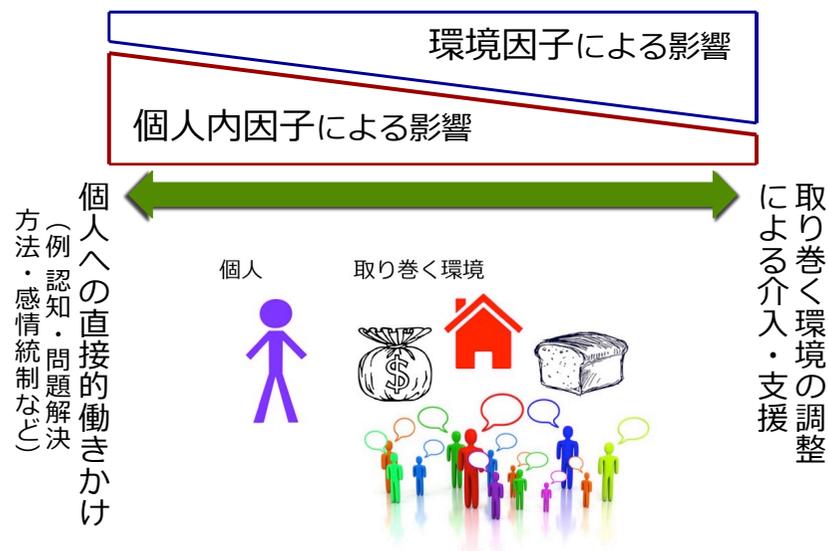
- ① QOLの不可知性
- ② 伴走/寄り添い
- ③ エコシステム的方法

「ソーシャルワークとは問題を解決することではなく、本人を取り巻いている状況に本人の力で立ち向かえるようになるように、一緒に状況の複雑さを小さくすることである」

(窪田暁子)

(猪飼 2016、p.45)

犯罪行為に至る要因の分析と支援の方向性

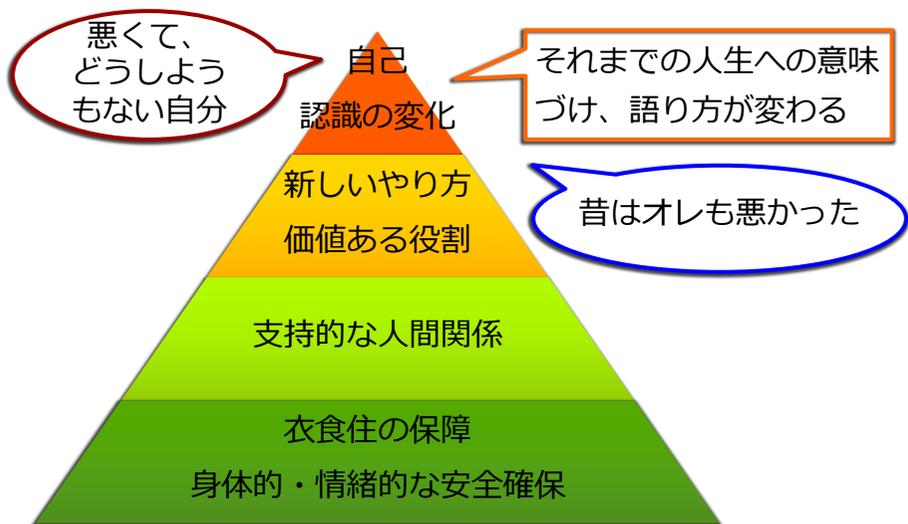


ソーシャルサポートの考え方

- ストレス状態を経験している人が問題を解決したり、適応したりするために重要
- **道具的サポート**：何らかのストレスに対処するために必要な資源の提供、資源を利用できるように情報提供
- **情緒的サポート**：ストレスによって傷ついた人が自発的に問題解決できるよう自尊心の回復や情緒の安定に資するように働きかける
 - 学習性無力感や不安感への対処、他者との意思疎通・自己の感情や要求の表出を容易にするための支援など

(浦 1992)

「犯罪をやめ続けること」と「自己認識の変化」の過程

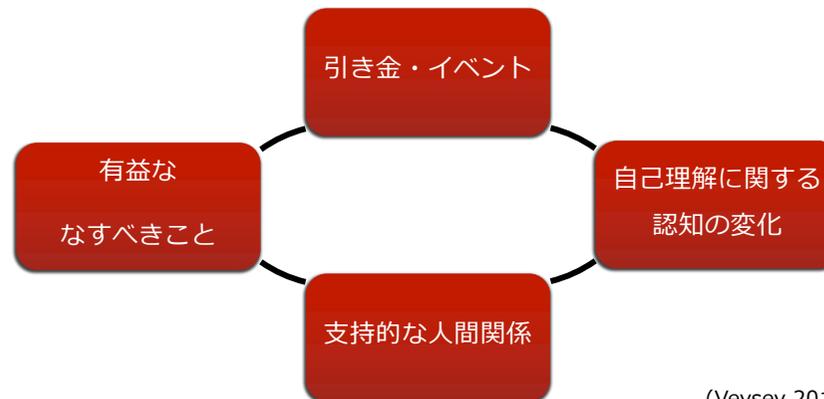


(Veysey = 浜井浩一 2015年, 4-12頁をもとに一部改編)

犯罪行為からの離脱 (desistance)

第一次離脱：行為を停止すること

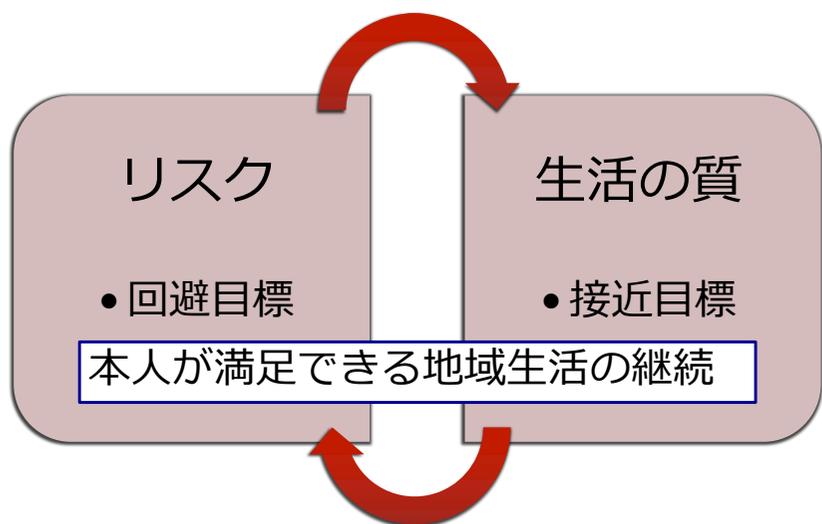
第二次離脱：新たな認知や態度を伴うアイデンティティ、新たな社会的役割や人間関係を作り出すこと



(Veysey 2015)

リスク対応／生活の質向上の相互補完モデル

(Lambrick 2015)



生活の質向上

「よき人生モデル (Good Lives Model=GLM)」
における『人生目標 (人間の中核となる基本財、幸、goods)』という考え方

人は『人生目標』を達成することを求める生き物



目標を達成する能力・手段が限られているとき



それでも目標を達成しようとするので、

犯罪に至るプレッシャーが高まる

犯罪をせずに目標を達成する手段の確保・必要な援助

(Ward & Maruna 2007)

「人生目標」とは？

1. 暮らし：生活することと生き延びること
2. 知識：学ぶことと知ること
3. 仕事と遊びに熟達すること
4. 自己選択と自立
5. 心の平穏
6. 人間関係や友情
7. コミュニティ：集団に属すること
8. 精神性：人生に意味を見出すこと
9. 幸せ
10. 創造性

(訳語はYates, P. M. & Prescott, D. S. (2011) Building A Better Life: Good Lives and Self-Regulation Workbook. (=藤岡淳子監訳 (2013) 『グッドライフ・モデル』誠信書房))

保護要因と「社会的絆理論」

➤ 保護要因

= 犯罪に至ることから「保護」するように作用

➤ 理論的説明：「社会的絆理論」(T. Hirschi)

- ✓ 人は逸脱行動をするのが当たりまえなのに、多くの人は犯罪行為をしない
 - ✓ 自分へのコントロール(統制)が効いているはず
 - 統制要因としての「社会的絆」への着目
 - 社会的絆は「保護要因」であるとも考えられる
- = 増やすことを目指すべき！

1. 愛着 (attachment)

- これが基底となる要因
- 家族、友人、コミュニティといった大切な他者との絆

2. 巻き込み (忙殺) (involvement)

- 遵法的な社会活動に関わり、忙しく過ごす時間

3. 繫留 (投資) (commitment)

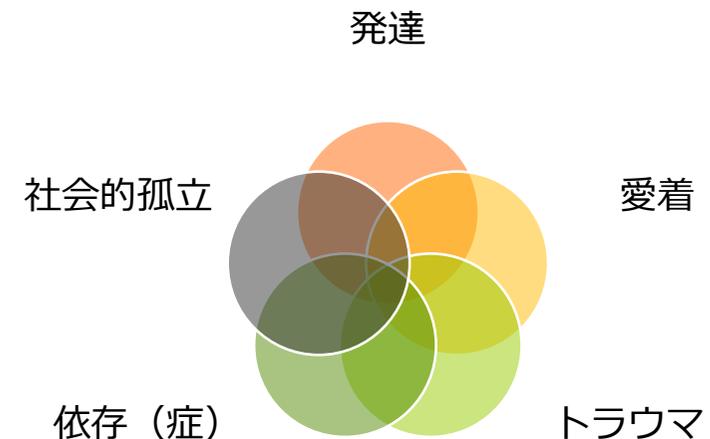
- 自分のキャリアに費やした時間やエネルギー
- 逸脱行為をとることへの損得勘定

4. 信念 (規範観念) (belief)

- 誠実さ、倫理観、社会の規則が公正であるとの納得

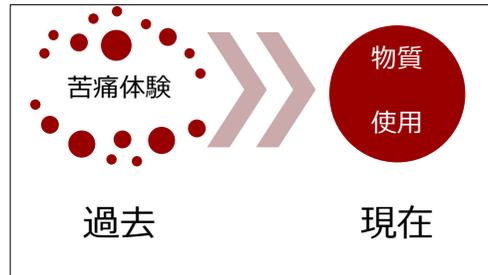
(浜井 2009、矢島ほか 2009)

当事者をよりよく理解するための5つの視点



依存症の「自己治療仮説」

- 1985年に心理学者カンツィアンが提唱
- 「人が依存症になるのは、無意識のうちに自分の抱える困難や苦痛を一時的に緩和するのに役立つ物質を選択した結果であり、究極の『自己治療』である」



(カンツィアン、アルバニーズ (松本俊彦訳) 2013)